

は他の二編より約一〜二カ月の遅れがあった。校正過程でその遅れを圧縮・解消しなければ刊行日程に支障が生じる。忌憚なくいえば、その時の焦りと苛立ちはこれまでに経験したことがない部類のものであった。「より正確に、より質の高いものを」という研究者的欲求と、「できるかぎり短期間で」という編集者の自制心との葛藤である。この葛藤への対処がどのように受け止められるのかは『通史』に対して寄せられるであろう評価によって判断するしかない。にもかかわらず、極めて微力であることは十分承知しながらも今回の編集作業において可能な限り自らの力量を注ぎ込んだという「自負」はここに記しておきたい。もちろんこうした「自負」の背景には、身近なところでは篠田弘編集委員長・編集室長、片岡弘勝ならびに吉川卓治といった前任の専任助手の方々をはじめとして、『名古屋大学五十年史』編纂にご理解とご支援をいただいた学内外の多数の関係者の方々の存在があったことは自明のことである。一専任編集室員として、この場を借りて心から感謝の意を表したい。

(名古屋大学史編集室助手)

史料とワードプロセッサ

専任編集室員 中村 治 人

日本語ワードプロセッサなる電子機器を、これまでに三台購入した。初めの一台は大学三年生の時で、卒業論文の作成から修士論文の準備段階まで、ほぼ三年間にわたり活躍した。しかし、修士論文作成にはいささか実力不足の感があったため、同一メーカーの最新機種に乗り換えた。間もなく一台(代)目は人に譲った。このころは数ヶ

月単位で新型機種が発表されていたため、性能はもちろん、使い勝手の向上にも著しいものがあつた。特に不足はなかつたが、名古屋大学史編集室に職を得たことで事情が変わつた。編集室は、備品等に関しては主に事務局からの借用品でまかつており、自由にメーカーを選ぶ余地がなく、また、複数名による共同作業という職務上の条件からデータの互換性が必須となり、結果として同一機種の使用が便利であつた。当初は、ワープロ文書のコンバーソフトを介在させて互換性を確保していたが、直にそれでは追いつかなくなつた。こうして、二台(代)目は現役のまま(もつとも、間もなく部屋の片隅でほこりをかぶる羽目となるが)、三台(代)目として他社ワープロを購入することになつたのである。しかるに、昨年末にはパーソナルコンピュータを購入したため、残つた一台も購入後一年数ヶ月にして早くもほこりをかぶり始めている。

ところで、ワープロを使い始めた頃、わたくしは既に教育史という領域に首を突っ込んでいたから、日常的には使用されない文字や読みの欠落、そして、変則的な送り仮名へのワープロの未対応は不自由でならなかつた。辞書性能の向上により多少の改善はみられはするものの、今日でもこれらの問題は依然として残されている。

日本語ワードプロセッサの実用化は画期的なことではあつたろう。しかし、日本語の電子処理は汎用レベルには程遠いと言わざるを得ない。わたくし個人の経験の域を出るものではないが、とりわけ編集室が避けて通ることのできない、いわゆる史料の中で用いられているような日本語に関しては先に挙げたような問題が顕著である。辞書の改良により改善される読みや送り仮名の問題はともかく、日本工業規格の第一および第二水準に含まれない文字に関しては、深刻と言うよりは致命的ですらある。

文字データの記録形式としてもつとも普及しているテキスト形式は確かに便利ではあるが、史料を史料として扱うには、すなわち、一定の文字列をその歴史的価値のできるだけ多くの部分を保持したまま電子情報媒体の介在す

る環境で利用しようとする際には、極めて制約の多い手段である（自然科学分野でも事情は変わらない）。用いた文字がなければワープロの外字機能などを用いて自らその文字を作成することになり、必然的にテキスト形式のデータには反映されないものとなるのである。インターネットをはじめ各種パソコン通信網は着実に研究者の間にも浸透している。そうした場において、コンピュータの性能向上や価格の低下に伴う一般への普及を背景として、テキスト形式のデータでは賄いきれない部分を担っているのが画像データである。しかし、画像と文字とではやはり意味や用途が異なっており、必ずしも一方が他方の代用になるといった類のものではない。

名古屋大学史編集室に保存されている資（史）料は、名古屋大学史資料室に引き継がれることとなっている。資料室は、情報化社会と呼ばれるこの時代において何をなすべきなのであろうか。コンピュータの活用という意味では、この先数年間は実質的な意味において過渡期の瀬にあたると思われるのであるが、大いなる宿題である。

（名古屋大学史編集室助手）

名古屋大学史編集室に入って

編集室事務員 水野 小百合

編集室の事務員三代目として勤務し三年が経ちました。『名古屋大学五十年史 通史』も無事完成し、嬉しく思っています。

編集室へ入った頃は民間企業からの転職ということもあり、学校特有の雰囲気になじめず悩んだこともありまし